

また 1 億円余もの値上げ

県廃棄物処理センターの処理料金

鈴鹿市のゴミ焼却後の灰などを溶融処理する「廃棄物処理センター」（四日市市小山町）の処理料金が、来年度また大きく値上げされようとしています。操業開始時の平成14年、トン当たり2万円だったのが、17年度2万8千円に、そして今回3万5千円プラス灯油値上り分7千円、合計4万2千円となり、わずか5年で2倍以上という、とんでもない値上げです。

鈴鹿市の搬入量は約8千トン、処理料金は1億1200万円もの増額になります。このセンター計画に参加した時の県の誘い文句「1万5千円」から見ると、何と毎年2億円もの莫大な負担増です。

県の責任は重大、20億ぐらいでは済まされない

11日の本会議一般質問で私は、このような値上げを押し付ける県の無責任な姿勢を問題にしました。県の資料を見ても、事業1年目の実績ですでに処理単価は約3万5千円となっていて、もとの単価2万円がインチキだったことは明らかです。普通の商売なら、契約破棄となって当然なのに、相手が県だから、ほかに処理する所がないから、高い料金を払ってそのまま続けるという理屈は、納得できません。

県はこの大失敗の責任を、これまでの赤字20億円を肩代わりするだけで、オシマイにしようとしています。今後また赤字要因が出れば、その分はそっくり値上げを市町がかぶり、県は負担を逃れる恐れがあります。

センターでは大量の灯油をボンボン燃やしています。それは予定していた民間の産廃があまり入ってこないからで、その分も自治体の処理料金に上乘せされているということです。こんないい加減なことばかりの施設はもう当てにせず、鈴鹿市は自前の処理にすることを、真剣に考えるべきです。

なくなった「同和地区」を「まだある」と言う、不見識な姿勢

同和対策事業のための特別法がなくなって、もう5年になります。法がなくなったのは、同和事業がその目的を終えたからで、そのために指定した地域である「同和地区」という名称も、なくなったのです。

11日の本会議で私は、「同和地区はまだあるのか、ないと認識しているのか」と、市長と教育長に質問しました。答えは、「法的にはなくなったが、まだある」という、驚くべき認識でした。私は「松阪の市長は、『ない』と明確に言っているが、鈴鹿市長は『ある』と言う。この認識の違いこそが問題だ」と指摘しました。

「言われなき差別」だから何も残さず解決できる

同和問題 = 部落差別問題は、他の人権問題（例えば男女差別、外国人差別）とちがって、まったくの「言われなき差別」でした。男女とか外国人は、誰が見ても「ちがい」がありますが、その「ちがい」を理由とした差別はいけないのです。ところが部落差別は、人に何も「ちがい」がないのに、ただ偏見を持って差別したのです。同和対策法は、その偏見の理由となった地域環境や貧困をなくすための事業を集中的に行なったのですが、その事業を行なうための地域を特定したのが「同和地区」と呼ばれました。そして同和事業が完了し、差別的な実態がなくなった、すなわち偏見の原因となった実態が解消されたので、もう「同和地区」などと言う必要もなくなったのです。

鈴鹿市長がなくなったものを「ある」と言うのは、同和問題を他の人権問題とごっちゃにしているのです。もう一度言うと、「男女差別」がなくなっても「男女のちがい」はある。しかし「部落差別」はなくなれば、まさに「何もちがわない」、まったく何も残らないということなのです。「部落」とか「同和」という言葉そのものも、早くなくすのが同和対策の唯一最大の目的だったのです。まじめに同和問題を考えている人でも、上記のような視点に立たないと「いつまでも差別はなくなるらない」論の袋小路に迷い込んでしまうのです。

市役所の南玄関にある「部落差別をなくそう」の大看板は、鈴鹿市の不見識を毎日世間にさらしています。少なくとも5年前には撤去するべきだったのに、今もなお堂々と立てているのは、本当に恥ずかしいことです。

お年寄りにさらに負担押し付ける 「後期高齢者医療制度」2008年から

75歳以上の高齢者を、今の健康保険から切り離して新たに「後期高齢者医療制度」に統合する改悪が、進められています。具体的には、各県ごとに一本の医療保険とする、高齢者が費用の1割を保険料で負担する、保険料は試算で頭割り3100円、所得割3100円、合計毎月6200円の予定、保険料は介護保険のように年金から天引きする、医者にかかった時の負担も1割だが、所得の高い人は3割負担になる、などです。

来年1年かけて準備し、2008年4月から全国いっせいにスタートしますが、か細い年金からも保険料を取り立て、カネが無ければ医者に行けなくする、いったいどこまでお年寄りをいじめるのでしょうか。12月議会に出された関係議案に、日本共産党は反対しました。

入札がオール最低価格という事態に

今年の6月ごろから、工事入札結果がほとんど「最低制限価格」となり、抽選で落札業者が決まるという異常な事態になっています。以前から小さい工事でその傾向がありましたが、今は大きな工事もほとんどが最低価格となっているとのことです。

本年4月～11月の入札状況

種別	入札件数	最低価格入札
土木	146	114
建築	16	3
舗装	64	64
合計	226	181

この表を見れば一目瞭然ですが、全体の8割、舗装では全部が最低価格入札となっています。

市にとっては何億円単位で工事予算が減り、結構なことですが、それでいいのかどうか釈然としません。「談合」が完全になくなっているから、という見

方ができますが、一方では、業者の営業努力でなく「クジ運」だけで仕事が取れるということで、いい仕事が今後も保証できるのか疑問が残ります。いったい鈴鹿市の建設業界はどうなっているのでしょうか？

本年もご愛読、ご支援ありがとうございました。2007年は、選挙の年です。引き続きがんばりますので、よろしくお願ひします。良いお年を！

障害をのりこえた物語

市内若松で、障害者が働く福祉工場「アクティブ鈴鹿」を設立し経営する伊藤良一さんと奥さんの久仁子さんが出版した「ふたりでひとり」は、読んだ人の心がほっとする本である。いろんな苦労を次々に越えてがんばってきたことを、カラッと明るく描いていて、読む側もその楽天的な生き方にむしろ励まされる。「涙を出さずに感動した」物語である。

伊藤さんは会社経営者であるが、11年前に屋根から転落する事故で手足の自由を失い、障害者となった。その後、一念発起し自分の会社に福祉工場を立ち上げ、多くの障害者とともに働いている。久仁子さんは文字どおり夫の手足となって、いっしょに生活と事業を進めている。

目標を持って生きると、道が開けてくる

この福祉工場ができたころ、議会の委員会で見学に行ったことがあった。伊藤さんの話も聞いて、私は「鈴鹿でも立派な志の人ががんばっている」と思った。しかしその時、こうも思ったのである。「もともと社長さんだったし、資金などもあるという良い条件があったから出来たのだろう。」そんな認識がまちがいだったことが、この本でよく分かった。

まず、身動きできない、人の介助なしには生きていけない障害の身で、自分の毎日の生活そのものが大変なことだということ。この上に、会社を起こし経営していくという、健常者でもしんどい仕事に挑んだこと。障害者だからといって経営責任は軽くなれないし、仕事の受注、資金ぐり、人事などの問題も避けられない。一生なんとか暮らしていける余裕はあったのに、あえてしんどい道を進もうとした、その気力。しかしただ「やる気」だけで走るのではなく、きちんとした計画や見通しをもった「経営者」の目。

伊藤さんは、障害者になって急に立派になっただけでない。もともと障害者になる前から立派な経営者であり、まじめな家庭人であったということが、成功の大きな要素だと思う。久仁子さんは「目標を持って生きると、不思議と道が開けてくる。何かを失うと必ず何か補ってくれる。失うものが大きかった主人は、得るものも大きかったと思います。」と、淡々と書いているが、我々凡人はなかなかそんな境地にはなれないものである。